三月 宝生会 月並能

三月八日（日）午後二時始

開場 午後一時

於 宝生能楽堂

14:00 誓願寺 来迎拍子

シテ 亀井保雄

ワキ 高井松男

ワキツレ 御厨誠吾

〃 宝生尚哉

間 大藏基誠

大鼓 國川純

小鼓 鵜澤洋太郎

太鼓 三島元太郎

笛 一噌庸二

後見 當山孝道　佐野登

地謡 澤田宏司　和久荘太郎　小林晋也　小倉健太郎　山内崇生　金井雄資　東川光夫　大友順

16:05 酢薑

大藏彌右衛門

大藏吉次郎

〈休憩十五分〉

16:35 弱法師

シテ 登坂武雄

ワキ 宝生欣哉

間 大藏教義

大鼓 柿原弘和

小鼓 観世新九郎

笛 松田弘之

後見 宝生和英　中村孝太郎

地謡 高橋憲正　小倉伸二郎　水上優　野月聡　武田孝史　高橋章　前田尚廣　高橋亘

終演予定　十七時四十五分頃

演目の解説

能「誓願寺　来迎拍子」（せいがんじ）

諸国を遊行し「六十万人結定往生」の御札を配る一遍上人は、都誓願寺で一人の女に札を授けます。女は札の文言を見て、六十万人しか往生出来ないのかと疑問を抱きますが、上人は夢想で得た四句の文の上の字を書きつけた御札であることを説き、感銘を受けます。住処を問われた女は和泉式部の石塔まで案内し、誓願寺の額を上人の手で六字の名号に書き換えて欲しいと頼むと姿を消します。上人が額を書き換え、一同で南無阿弥陀仏を唱えると、和泉式部が歌舞の菩薩と現れて、喜びの舞を舞います。小書「来迎拍子」はクセの「聖衆来迎す。落日の前とかや」の所で特殊な足拍子を踏みます。

狂言「酢薑」（すはじかみ）

酢売りと薑売りが都へ商売に出掛ける途中、上下の街道で出会います。そこで、お互いの商い物の格の高さを主張し合います。また、酢売りは「ス」とかけた駄洒落を、薑売りは「辛（い）」を掛けた駄洒落を言い合い、どちらが勝つか勝負しながら都へ向かいます。最後にはお互いを認め合い、一緒に笑って打ち解けるのでした。二人の軽妙な言葉遊びが面白い狂言です。

能「弱法師」（よろぼし）

高安通俊は、我が子を讒言で失い、四天王寺で施行を行っていました。一方捨てられた子、俊徳は盲目となり、「弱法師」と綽名されて四天王寺を彷徨い、通俊から施行を受け、会話を交わします。通俊は我が子と気づきますが、人目のあるうちはさすがに名乗りにくいと考えて、日想観を拝み、夜になり人込みに一人取り残された我が子に寄り添い父と明かします。驚いた弱法師が逃げようとするのを宥め、共に故郷に帰って行きます。

次回予告

二〇二〇年四月十二日（日）十四時始

八島　佐野登

百万　野月聡

文化庁文化芸術振興費補助金
（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会